

都市は人の心と社会を疲弊させるか?¹⁾

渡部美穂子・金児暁嗣

要 旨

本研究は都市民と村落民の生活の営みや価値観に関する調査研究をとおして、都市化が人びとの行動様式、価値観、パーソナリティにどのような変容をもたらしてきたのか、都市は人びとの心を阻害するのか、という問題を解明することを主たる研究目的としている。そのために、関西圏における都市として大阪市、村落地域として京都府の夜久野町と笠置町、奈良県の西吉野村、和歌山県の日高町、兵庫県の篠山市を選び、それぞれの地域住民に対してさまざまな角度から質問紙調査を実施した。分析の結果、都市化は共同体意識や伝統的態度を弱めているけれども、都市住民は村落住民よりも学歴が高く、自尊心が強く、また、異文化を受容する姿勢を強く有し、死の問題から逃避する程度が少なかった。本研究によって、都市化は少なからず人間関係を稀薄化するけれども、けっして精神的な荒廃を招くものではないことが示された。

キーワード：都市化、宗教、死、コミュニティ意識、自尊心

はじめに

大阪市立大学文学研究科は、平成14年度に「都市文化創造のための人文科学的研究」と題する課題で「21世紀 COE プログラム」に採択された。本拠点では、都市に蓄積されてきた文化的伝統を解明するという基礎研究の成果をふまえて、都市文化の現状と都市民の生活を調査研究することを目的の一つとしている。ここで報告する一連の調査研究はこの事業の一環として実施されたものである。

一般に、都市での生活は心理的ストレスを生み出すといわれてきた。Wirth(1938)のアーバニズム理論に代表されるこうした説は、アーバニズム(人口規模・密度・異質性の増大)が人びとの生活を概して悪い方向へ変化させると論じている。たとえば、家族、親戚、近隣、地域

集団などの第一次接触の衰退と欠如を生みだし、その結果、集団の凝集性を弱め、個人に深刻な結果をもたらすと主張する。人びとの生活に安寧と秩序をもたらしてきた共同体のシステムが都市化とともに解体するとすれば、そのことによって都市住民のパーソナリティは不適応をきたしているのだろうか。はたして都市住民は、アーバニズムによる不利益をこうむっているのだろうか。

1. 都市における物的環境

まず、都市における物的環境から考えてみよう。人口密度は都市を定義する重要な指標のひとつであるが、当然のことながら、人口密度が高ければ高いほど、人びとは密集性を感じる。密度の高さと密集の感覚は、精神的な緊張を生み出し、その緊張を低減させることが必要とな

る。低減のために、攻撃や引きこもり行動が取られる。さもないと、緊張やストレスが精神的あるいは身体的な疾患を生み出すだろう。かくして、都市の稠密は反社会的適応や精神病理を引き起こす。これが密集理論(crowding theory)の大枠である。しかし、本当に密集性が都市民にストレスを感じやすくさせているのだろうか。

動物研究、パーソナル・スペースの研究、密集状態におかれた人びとの研究、密度の異なる近隣地区およびコミュニティ間の比較研究、そして密度の異なる条件下で生活する人びとの調査研究など、この問題に関するあらゆる研究を批判的に検討した Fischer(1976)は、個人間の密集が人間性を侵害し、深刻な病理を生み出すという通俗的な理論は実質のあるものというよりもむしろ神話であるとの結論に至っている。

結局のところ、密集状態による不快には、他の状況が絡んでおり、ときには不快になるけれども、単に密集性それ自体は、都市で生活を営む人びとの精神状態を少しも悪化しないようである。むしろ、Krupat(1986)が指摘するように、密集とそれに起因する騒音、大気汚染、通勤などの都市生活に付随するさまざまな条件がストレスをもたらす可能性は高いけれども、これらのストレスャそれぞれが悪い方向に働くのは、人間が環境を統制できないと感じるときである。

身体的健康面ではどうだろうか。都会につきものの熱と騒音と大気汚染は、健康を害する要因であろう。したがって、一般には田舎の住民のほうが都市民よりも長寿であると思われている。平均寿命の長い県といえば、沖縄、福井、長野、熊本など、非都市がすぐに連想される。しかし、人口密度と死亡率との関係について調べた研究によれば、都市の過密が都会人の健康を阻害するという一貫した傾向はみいだされていない(Factor & Waldron, 1973; Ford, 1976)。Fischer(1976)はこのことを、田舎という健康によい環境で生活できるという利点は、現在では都市に特有の高度医療へのアクセス可能性によって相殺されているからだと指摘している。

以上のように諸研究を概観したところ、少なくとも、都市の密集性それ自体が社会的・心理

的にマイナスである、という通俗的な説を裏づける科学的な理由はほとんどないといえる。にもかかわらず、人びとは田舎や田園に郷愁を感じる。それはいったいなぜだろうか。

2. 都市における社会的関係

—親族と近隣関係を中心として—

空前のヒットを続け、8千万人の観客を動員した映画「男はつらいよ」シリーズ(山田洋次監督、渥美清主演、全48作)は、「日本人の心のふるさと」と評されてきた。そこにはまさに家族の原風景が描かれ、舞台の多くは都会よりも小都市であったり村落であったりする。人びとはこの映画に、あるべき家族と近隣関係のイメージを求めたといえる。

興味深いことに、アメリカにおいても類似した心理を推測させるデータがある。人びとに住みたい場所をたずねたところ、現在住んでいるコミュニティを好む傾向にあるが、他に移住するならば、より規模の小さな場所が好まれることが示された(Commission on Population Growth and the American Future, 1972; Louis Harris Assoc., 1979; Zuiches, 1981)。同様の結果が、アメリカのみならずイギリスやオランダにおいても得られている(Mann, 1964; Polls, 1967)。

このような田舎への志向性は、古きよき時代への郷愁であって、一種の幻想なのだろうか。それとも、田舎には都市部にはない温かい近所づきあいや人間関係、あるいはコミュニティへの帰属意識といったものが今も実際にあり、それが都市住民を田舎に惹きつけるのだろうか。

村落には都市に欠如している近隣関係や共同体が存在するとすれば、都市住民に特徴的な心理の解明にあたっては、彼(彼女)らの周囲をとりまく社会的関係についての考察を抜きにすることはできない。同様に、村落住民に特徴的な心理の解明には、村落生活の社会的関係を分析する必要がある。最初に、近隣関係から始めることにしよう。

都市の特徴をさすのに匿名性や無関心ということばがよく使われる。冒頭に述べたアーバンイズム理論を端的に示したことばである。これまでの研究を概観すると、この通説は概して当

たっている。多くの研究が、洋の東西を問わず、コミュニティが大きくなるにしたがい、隣人とのかかわりは少なくなることをみいだしている(例: Campbell, 1981; Fischer, 1982; Richardson, 1973; Swedner, 1960; Tsai & Sigelman, 1982; Whyte & Parish, 1983)。また、都市部における援助行動の少なさを示した社会心理学的研究もある。Amato(1983)は、援助が必要とされる5種類の状況を設定し、小さな村から大都市までの55ヶ所で援助行動を測定したところ、大都市より小規模コミュニティのほうが、援助が提供されやすいことを明らかにしている。

都市部における近隣社会の凝集性の低下や援助行動の少なさを示したこれらの研究結果から、ただちに都市が社会的関係を稀薄にすると結論づけることに反対し、下位文化理論(subcultural theory)を提唱したのが Fischer (1976, 1982)である。彼は次のように説明する。

アーバニズムの作用は、個人が容易に手の届く範囲により多くの人びとを配置することであり、それによって地域だけではなく、より多くの結合の基礎を供給することである。こうして、都市住民は、ある意味では、村落の人びとが近隣社会から引き出している交際相手を、仕事や特定の関心の文脈から引き出した友人に置き換えているように思われる(1976, 訳書, 176頁)。

しかしながら、Fischer 自身、これを支持する結果を得ていない(Fischer, 1982)。わが国では、大谷(2001)がアーバニズム理論を検討するために、大阪近郊都市(西宮)、東京近郊都市(八王子、武蔵野)、地方中核都市(松山)における隣人づきあいを調査している。その結果、これら4都市の間に有意な差はみいだされず、都市ほど近隣関係が稀薄になるという説は否定されている。しかし、大谷(2001)が対象とした4つの地域は、その人口規模や密集性からそれぞれが都市として違いがなく、必ずしも都市と非都市を比較したものではないので、調査対象地域に問題がある。

アーバニズム理論と下位文化理論の優劣を検証した研究は堀江たち(2003)によって行われて

いる。この研究では、関西圏の村落住民と大阪市内の住民を対象に、家族・親戚と友人の2種類の関係について、頼ったり頼られたりする間柄にある人を挙げさせている。アーバニズム理論からの予測では、サポートの交換関係にある人の数は、家族・親戚間と友人間のいずれにおいても、村落よりも都市のほうが少ない。一方、下位文化理論によれば、頼ったり頼られたりする関係の数は、家族・親戚間では都市は村落よりも少ないが、友人間では逆に都市は村落よりも多いことが予測される。堀江たち(2003)の研究が明らかにしたところによれば、その数は家族・親戚については都市住民では3.4、村落住民では4.1であり、友人については都市住民が2.3、村落住民が2.6であった。いずれも統計的に有意に村落住民のほうが都市住民よりもサポートの交換関係数が多いことが示されている。この結果は、下位文化理論よりもアーバニズム理論を支持しており、都市化に伴い近隣のつきあいのみならず、広く人間関係が稀薄化することを示唆している。さらに、同じ研究グループによる調査では、地域協同意識が都市住民よりも村落住民のほうが圧倒的に強いことも示されている(河野たち, 2003)。

こうしてみると、田舎には親密で温かい支援的な社会関係が残っており、都会では社会的関係から自由であるという意味で個人主義が強い反面、都市住民の孤独感も暗示される。そこで次に、都市生活が人びとの行動様式や価値観、あるいはパーソナリティにどのような影響を与えているかを問うことが必要となる。

3. 本研究の目的

—都市住民の行動様式と価値観—

村落と都市を対比して、自然と人工、コミュニティと個人主義、伝統と変化、馴染み深さと馴染みのなさ、といった両極を含んだ対概念がよく使用される。これらの対概念について、前者の順機能と後者の逆機能を強調したのがアーバニズム理論である。それによれば、都市での生活は人びとを孤独にさせ、不満を高め、不幸にする、ということになる。先の堀江たち(2003)の結果は、そのことを暗示はさせるけれども、対人的ネットワークの稀薄さがただちに精神的

安寧を損ねるという証拠はない。実のところ、こうした見解が支持されるのか否かに関する実証的研究はほとんど見当たらない。

たとえば、宗教をとりあげてみよう。都市化に伴い宗教的信仰が稀薄になることが概ね確かめられているとしても、そこでいう宗教とは、伝統的な定義による宗教である(金児, 1997)。歴史的には、村落で守られている宗教的伝統は、都市から広まったものであり、革新的な新宗教はすべてそうだ。現代においても、それは事実であるし、都市部には都市特有の神々が誕生している(石井, 1994)。だとすれば、都市化に伴う心理的ストレスを軽減するための防御システムが都市部に欠如している、と断定することもできないであろう。

死の問題についても、近代化や都市化が進むにつれて、死に対する虚無的な態度が強くなる、という通説がある。はたしてそれは事実か否か、科学的な研究はまったくなされていない。さらに、仮に都市住民にそうした死生観が強くとも、それが精神的安寧を妨げていると結論することはできない。

そこで本研究では、都市化が人びとの行動様式や価値観にどのような変容をもたらしてきたのかを解明することを主たる目的とする。そのために、都市部と村落部の住民を対象に、宗教行動と宗教観、死生観、年中行事・習俗、コミュニティ意識、自尊心、日本と外国への態度、近所づきあい、日ごろ抱いている感情、親族や友人との間でのサポートの交換など、さまざまな角度から質問紙調査を実施し、都市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴を明らかにしたい。

方 法

調査対象地域の選定 まず、都市化が高度に進んでいる地域として大阪市を選んだ。大阪市は24区に分けられているが、調査対象地域は大阪市内の東部、西部、南部、北部、中心部の5箇所から、人口密度が高い区をそれぞれ1つずつ選定した。選出された5つの地域は城東区、港区、阿倍野区、東淀川区、西区であった。

村落の調査対象は、関西地域の市町村の中から人口密度が低く²⁾、自然が豊かであり、なおかつ、若年者の居住もある程度認められる地域を選択した。選出された5地域は、京都府の夜久野町と笠置町、奈良県の西吉野村、和歌山県の日高町、兵庫県の篠山市であった。中心産業は夜久野町と篠山市が農業、西吉野村は農業及び林業、日高町は農業・漁業、笠木町は自然を生かした観光業である。ただし、篠山市の中心部は大阪市内への通勤圏内であり、市街地として発展しつつあることを考え、市中心部を除外して調査を行った。

調査対象者と調査方法

10箇所の地域それぞれの対象者数を400名とした。各自治体や区のそれぞれの投票区から選挙人総数に比例するように抽出人数を決定した。ただし、対象者は20歳以上85歳未満の住民とし、20歳代から70歳代以上までの各年齢と男女が均等に含まれるように抽出した³⁾。調査は2003年3月、郵送調査法によって実施され、都市・村落地域それぞれ2000名、合計4000名に対し質問紙を郵送した。そのうち有効回答数は1199名(有効回答率30.0%)であった。表1に有効回答者の内訳を示した。

表1 各地域の人数と平均年齢

| | 人口密度 ^(注) | 男性 | 女性 | 合計 | 平均年齢 | (SD) |
|---------------|---------------------|-----|-----|------|------|---------|
| 都市地域 (大阪市) | 港区 | 43 | 61 | 104 | 48.4 | (15.69) |
| | 阿倍野区 | 55 | 71 | 127 | 52.9 | (17.03) |
| | 城東区 | 57 | 48 | 105 | 53.3 | (17.84) |
| | 東淀川区 | 51 | 45 | 96 | 55.7 | (16.83) |
| | 西区 | 46 | 55 | 102 | 53.1 | (17.49) |
| 村落地域 | 日高町 | 58 | 56 | 114 | 51.7 | (16.73) |
| | 篠山市 | 70 | 81 | 152 | 53.1 | (17.49) |
| | 夜久野町 | 87 | 76 | 163 | 55.5 | (17.20) |
| | 西吉野村 | 62 | 72 | 135 | 51.9 | (16.60) |
| | 笠置町 | 53 | 46 | 101 | 59.3 | (17.00) |
| 全 体 | | 582 | 611 | 1199 | 53.0 | (17.00) |

(注) 人口密度は人/km²

返送があった方に対しては、謝礼として図書券500円分を送った。年齢や性別など重要な変

数に欠損値のあるデータを削除したところ、都市の対象者数は男性244名（平均年齢54.7歳，標準偏差17.14歳），女性279名（平均年齢50.9歳，標準偏差16.64歳）の計523名，村落の対象者数は男性310名（平均年齢54.1歳，標準偏差16.70歳），女性321名（平均年齢52.3歳，標準偏差17.28歳）の計631名であった。

質問紙

質問紙は，性別や年齢，職業，生育地域，健康状態といった個人内変数とともに，宗教行動や宗教観，死に対する態度（死観），コミュニティ意識，自尊心，日本と外国への態度，親戚・近所とのつきあいの程度，同調行動，ソーシャルサポートなどさまざまな価値観，態度，行動について問う項目で構成されたが，ここでは本研究で分析対象とした質問内容についてのみ報告する（質問項目については資料参照。ただし，宗教観と死観についてはそれぞれ表3，表4を参照）。

(1) 個人内変数

年齢，性別（0：男性，1：女性），学歴（教育年数），健康状態（1：まったく健康～5：まったく健康でない），経済状態（1：非常に苦労している～5：まったく苦労していない），家族数についてたずねた。なお，健康状態については数値が高くなるほど健康であるように反転して数値化した。

(2) 環境変数

仏壇・神棚の有無（0：ない，1：ある）が問われた。なお，質問紙の表紙には居住地を区別できる番号を記してあり，その番号をもとに大阪市内5地域とそれ以外の5地域に分類し，居住地の都鄙性（0：村落，1：都市）の変数として使用した。

(3) 行動変数

ここで扱う行動変数は，宗教行動，年中行事・習俗である。宗教行動は，16項目からなる金児（1994）の宗教行動尺度項目を使用した。この項目は「はい・いいえ」の諾否法により宗教にかかわる行動について問うもので，先行研究では修養行動，慰霊行動，現世利益行動という3つのパターンに分類されている。

年中行事・習俗については，雛祭りやお盆，

節分など10種の年中行事を自分の家で行っているかどうかをたずねた。

(4) 近所・親戚づきあいと地域協同意識

近所づきあいの緊密さについては，「ご近所の人とのつきあいは多いですか」「ご近所の人には信頼できる人が多いですか」など4つの項目に対して「はい・いいえ」の2件法でたずねた。親戚づきあいの緊密さについても，同様に2つの項目でたずねた。

地域協同意識については，河野たち（2003）が構成したコミュニティ意識の尺度項目を使用した。この尺度は「協同意識」「愛着感」「プライバシー意識」「人まかせ主義」という4つの下位尺度からなっているが，本研究では「協同意識」（8項目）のみを分析に用いた。回答は4件法（1：まったくそう思わない～4：非常にそう思う）によった。

(5) 日本と外国への態度

向井たち（2003）が構成した尺度を用いた。この尺度は3つの下位尺度から構成されているが，そのうち「異文化受容」（9項目）「愛国心」（7項目）を用い，5件法で測定した。

(6) 宗教観

金児（1997）の宗教観尺度のなかから19項目（6件法）を使用した。この尺度は多くの研究によって，向宗教性，加護観念，靈魂観念の3つの下位尺度からなることが明らかにされている⁴⁾。

(7) 自己の死への態度（死観）

自己の死への態度を多次元的に捉えるため金児・渡部（2003）が構成した8つの下位尺度からなる自己の死観尺度（64項目，6件法）のうち，因子負荷量が高い27項目を使用した。

(8) 正負の感情

Bradburn(1969)の感情尺度を金児(1998)が日本語に翻訳したものを使用した。この尺度は，最近の数週間における正の感情と負の感情を測定するそれぞれ5項目よりなる。諾否法による反応にもとづき，正感情尺度については「はい」の合計得点が0点と1点のケースを0点とし，最高得点を4点とした。負感情尺度については「はい」の合計得点が4点と5点のケースを4点とし，最低得点を0点とした。したがって，正感情も負感情も得点範囲は0～4点である。

(9) 自尊心

自尊心は自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚である。自分を肯定的に評価することによって人は満足感をもち、自己に対しても他者に対しても受容的でありうるという意味で精神的健康や適応の基盤となる。たとえば、自尊心の強い人は同調への圧力に屈することなく、麻薬を常用することが少なく、困難な課題にも粘り強く取り組み、孤独でないことが明らかにされている(Crocker & Wolfe, 1999; Leary, 1999; Tafarodi & Vu, 1997)。本研究では、Rosenberg (1965) や Coopersmith (1967) を参考に向井たち (2003) が構成した10項目からなる自尊心尺度を用い、5件法 (1:まったくあてはまらない~5:とてもあてはまる) で測定した。得点が高いほど自尊心が高くなるように加算して、自尊心得点とした。

(10) 生活満足度

「あなたは現在の生活にどの程度満足していますか」という質問に、4件法 (1:満足していない~4:満足している) でたずねた。

結果

まず、回収率について言及しておこう。本調査における質問紙票は、A4版で16頁から構成されており、設問への回答と投函はかなり骨の折れる作業である。この意味で、回答は調査実施者に対する援助行動であるともいえる。回収率を都鄙別でみると都市部では26.7%、村落部では33.25%で、この差は統計的に有意であった ($\chi^2=18.8, df=1, p<.0001$)。都市住民よりも村落住民のほうが人を援助する傾向が強いことが示唆される。

「方法」にのべた諸変数について、都鄙別に頻度や平均値を算出し、統計的検定を行った。その結果を得点範囲とともに表2に示した。以下では、それぞれの変数について都市と村落の違いを詳述する。

(1) 個人内変数

住居の都鄙によって差がみられたのは学歴と家族数であった。教育を受けた年数は村落住民よりも都市住民のほうが長く、家族数は村落のほうが都市よりも平均して1人多いことが示された。なお、健康状態と経済状態には差がみられなかった。健康状態については、都市住民も村落住民も平均値はまったく同じ得点(3.11)

表2 都鄙別得点と検定結果

| | 健康状態 | 経済状態 | 学歴 | 仏壇の有無 | | 神棚の有無 | | 家族数 | 宗教行動 | | |
|------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| | | | | ある | ない | ある | ない | | 修養 | 慰霊 | 現世利益 |
| 都市 | 3.11(0.91) | 2.89(1.17) | 12.73(2.78) | 281 | 249 | 204 | 324 | 3.09(1.49) | 0.84(1.39) | 1.43(0.89) | 2.12(1.31) |
| 村落 | 3.11(0.94) | 2.79(1.09) | 12.18(2.61) | 575 | 84 | 531 | 125 | 4.19(1.80) | 1.24(1.64) | 1.85(0.82) | 2.07(1.29) |
| 得点範囲 | 0~5 | 0~5 | 0~28 | | | | | 1~7 | 0~6 | 0~3 | 0~4 |
| 検定結果 | | | *** | *** | *** | *** | *** | *** | *** | *** | |
| | 行事・習俗 | 近所づきあい | 親戚づきあい | 協同意識 | 日本と外国への態度 | | 宗教観 | | | | |
| | | | | | 異文化受容 | 愛国心 | 向宗教性 | 加護観念 | 靈魂観念 | | |
| 都市 | 4.08(2.35) | 1.04(0.90) | 1.03(0.79) | 2.80(0.52) | 3.79(0.61) | 3.90(0.72) | 3.17(1.18) | 4.06(0.85) | 3.37(1.10) | | |
| 村落 | 5.08(2.28) | 1.59(0.88) | 1.41(0.72) | 3.04(0.52) | 3.66(0.54) | 3.93(0.69) | 3.38(1.13) | 4.22(0.86) | 3.51(1.11) | | |
| 得点範囲 | 0~10 | 0~4 | 0~2 | 1~4 | 1~5 | 1~5 | 1~6 | 1~6 | 1~6 | | |
| 検定結果 | *** | *** | *** | *** | *** | | ** | ** | * | | |
| | 自己死観 | | | | 感情状態 | | | 自尊心 | 生活満足度 | | |
| | 恐怖と苦痛 | 逃避と未知 | 消滅と虚無 | 浄福な来世 | 生の証と集大成 | 正感情 | 負感情 | | | | |
| 都市 | 3.47(1.19) | 4.06(0.94) | 4.21(1.01) | 3.01(1.21) | 4.07(0.87) | 1.61(1.47) | 1.32(1.25) | 3.42(0.60) | 2.86(0.74) | | |
| 村落 | 3.60(1.24) | 4.21(0.95) | 4.14(1.03) | 2.96(1.22) | 4.07(0.94) | 1.57(1.48) | 1.30(1.33) | 3.32(0.60) | 2.90(0.73) | | |
| 得点範囲 | 1~6 | 1~6 | 1~6 | 1~6 | 1~6 | 0~4 | 0~4 | 1~5 | 1~4 | | |
| 検定結果 | | * | | | | | | ** | | | |

(注1) 仏壇と神棚の有無に関するセル内の数値は頻度を表わす

(注2) 仏壇と神棚の有無は χ^2 検定、その他の変数はt検定による結果 * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

で、「普通」(3点)よりもやや健康だと回答している。経済状態については、都市部と村落部のいずれにおいても、「どちらともいえない」(3点)よりもわずかに苦勞している方向にある。現在の不況を反映する回答であろうか。

(2) 環境変数

家に仏壇をもっているのは都市部では53.0%、村落では87.3%であり、神棚については都市部では38.6%、村落では80.9%であった。 χ^2 検定を行なったところ、いずれも都市部よりも村落地域のほうがそれぞれを有する割合が多かった。きわめて大きなこの違いは、都市部よりも村落地域のほうが伝統的な習俗・儀礼に熱心であることを示している。

(3) 行動変数

① 都市と村落の宗教行動 項目番号16を除いた15種の宗教行動に対応分析を施したところ、図1に示したパターンが得られた。第2軸目までの説明率は35.2%であった。第1軸(横軸)のプラス方向には、「信仰グループへの参加」や「宗教関係の新聞や本を読む」など、内発的な動機から宗教への接近を示す行動があり、マイナス方向には「おみくじ・易・占い」や「祈願」、「お守り・おふだ」など、外発的な宗教的動機からの行動がある。したがって、第1軸は「心の宗教 - 物の宗教」を表す軸と解釈される。また、第2軸(縦軸)のプラス方向には、「おみくじ・易・占い」、「信仰グループへの参加」、「宗教関係の新聞や本を読む」など、自身がこの世で生きていくうえでの関心にもとづいた行動があるのに対して、マイナス方向には慰霊的な行動が集中している。それゆえ、第2軸は「此岸 - 彼岸」を表す軸と解釈できる。

図をみると、修養行動が第1象限、現世利益行動が第2象限、慰霊行動が第2軸のマイナス方向(彼岸)に集中しており、先行研究と同様、明瞭に3つのパターンに分類されている。

地域別にスコアを示した図2をみると、都市部の大阪は村落部と大きく異なり、「物の宗教 - 此岸」を志向する宗教行動に従事していることがわかる。村落部では、日高、笠置、夜久野、篠山が「物の宗教 - 彼岸」を志向する行動がとられているのに対し、西吉野では「心の宗教 - 彼岸」志向的な行動がとられている。

年齢・性別で示した図3をみると、若年層は圧倒的に「物の宗教 - 此岸」志向的であるが、年齢が上昇するとともに「心の宗教 - 彼岸」志向的な行動が顕著になっていく。性別の違いはほとんどなく、男女で宗教行動に大きな差はないといえる。

後の分析で、「仏壇の有無」と「神棚の有無」

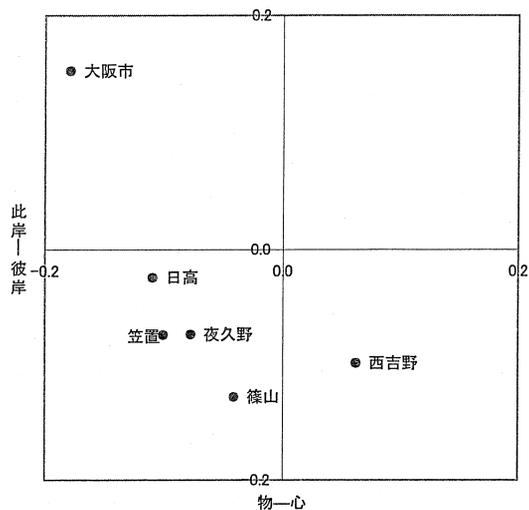


図2 地域別の宗教行動

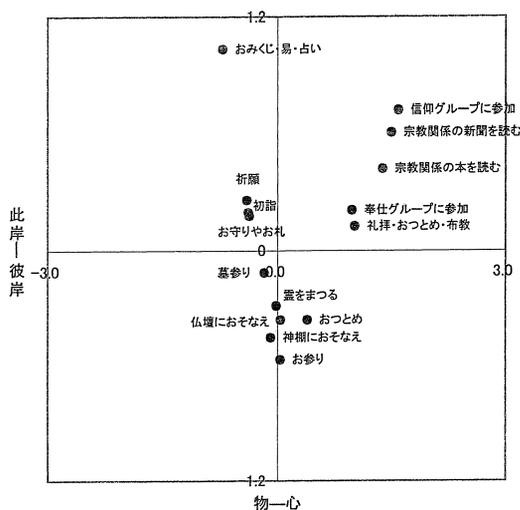


図1 宗教行動のパターン

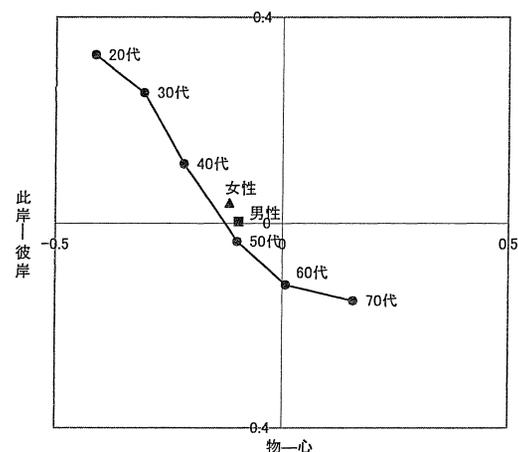


図3 宗教行動の世代別・性別比較

を別の変数として加えるので、15種の宗教行動のうち、「仏壇にお花やお仏飯をそなえる」と「神棚にお花や水をそなえる」の2項目を除外して、修養行動、慰霊行動、現世利益行動の3種に分類された13種の宗教行動について、それぞれの行動が行われている場合を1、行われていない場合を0として粗点を合計し、宗教行動得点とした。表2より、修養行動、慰霊行動はいずれも都市よりも村落で多く行われているが、現世利益行動は住居の都鄙による差がみられなかった⁵⁾。

② 行事・習俗 10種の習俗のうち、都鄙間で有意な差がみられなかったのは「雛祭り」、「七夕」、「節分」の3種だけであり、他のすべてにおいて村落のほうが熱心に行われている。なかでも上位3つは、「お盆」(都市77.3%, 村落92.0%), 「正月のしめ飾り」(都市57.2%, 村落84.8%), 「彼岸」(都市60.7%, 村落77.9%)であった。表2の得点から、村落が都市よりも平

均値で1多いことが示されている。こうしてみると、都市化に伴う伝統行事の衰退を指摘することができる。

(4) 近所・親戚づきあいと地域協同意識

表2に示したように、都市住民よりも村落住民のほうが近所づきあいや親戚づきあいに熱心で、近所や親戚の人びとに信頼感をもっており、また、地域コミュニティの諸活動への参画と協力の態度を強く有していた。

(5) 日本と外国への態度

表2より、「異文化受容」得点は、村落住民よりも都市住民のほうが高く、都市に住む人びとは外国の文化や他民族を受け入れる姿勢にあるといえる。しかし、「愛国心」は住居の都鄙で差がみられなかった。一般に、愛国心の強い人は異文化を受容しないように思われているが、「異文化受容」得点と「愛国心」得点の間には、まったく相関が認められなかった($r=-.03$)⁶⁾。

(6) 宗教観

表3 宗教観項目因子負荷行列表

| 項 目 | I | II | III | Mean | SD |
|----------------------------------------|---------|------|------|------|------|
| I：向宗教性 | | | | | |
| 16 よい生活を送るためには、何らかの宗教的信仰が必要である | .94 | -.03 | -.05 | 3.1 | 1.36 |
| 17 信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる | .88 | .00 | .00 | 3.1 | 1.31 |
| 15 信仰に裏打ちされた生き方こそ、人の真の生き方である | .80 | -.08 | .15 | 3.1 | 1.30 |
| 10 どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれない | .71 | .08 | .11 | 3.4 | 1.43 |
| 2 宗教によって、自己の存在の意味が教えられる | .63 | .27 | -.14 | 3.6 | 1.32 |
| II：加護観念 | | | | | |
| 1 先祖崇拜は美しい風習である | -.02 | .73 | -.07 | 4.7 | 1.04 |
| 7 神社の境内にいると心が落ちつくことがある | -.03 | .73 | .07 | 3.9 | 1.20 |
| 3 お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感ずる | .09 | .70 | -.09 | 4.5 | 1.03 |
| 6 お寺、神社、教会などから安心感を得ることができる | .16 | .63 | .10 | 4.0 | 1.19 |
| 12 氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である | .02 | .62 | .04 | 4.1 | 1.16 |
| 18 観音さんやお不動さんに親しみを感ずる | -.01 | .59 | .14 | 3.6 | 1.21 |
| III：靈魂観念 | | | | | |
| 8 死者の供養をしないとたたりがあると思う | -.16 | .09 | .76 | 3.4 | 1.43 |
| 9 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ | .14 | -.13 | .70 | 3.2 | 1.49 |
| 14 神や仏をそまつにするとばちがあたる | -.07 | .18 | .68 | 4.0 | 1.30 |
| 13 死後の世界はあるように思える | .15 | -.07 | .68 | 3.3 | 1.46 |
| 11 仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる | .32 | .07 | .49 | 3.3 | 1.36 |
| | 寄 与 率 | 3.41 | 3.11 | 2.61 | |
| | 因子間相関係数 | II | .46 | | |
| | | III | .50 | .43 | |

削除項目

- 4 宗教は心身のよい修養になる
- 5 お盆のときに、先祖の霊は子孫の家に帰ってくる
- 19 既成の古い宗教よりも新しい宗教に魅力を感じる

19個の項目について因子分析（主因子法→プロマックス回転）を施した結果、先行研究と同様に向宗教性（宗教への好意的態度）、加護観念（オカゲ意識）、靈魂観念（タタリ意識）の3因子が抽出された（3項目削除）。この結果を表3に示した。マイナスの負荷量を示した項目を反転させたうえで、それぞれの因子に高く負荷する項目の評定値を加算し項目数で割った値を尺度得点とした。表2より、3つの宗教観はいずれ

も村落でその得点が高く、都市住民は村落に暮らす人びとよりも宗教意識が稀薄であることが確認された。

(7) 自己の死への態度

27の死観項目について主因子法（プロマックス回転）による因子分析を施したところ、5因子構造が得られた。さらに単純構造を阻害する1項目を削除して再度因子分析し、最終的に5つの因子が抽出された。その結果を表4に示した。

表4 死観項目因子負荷行列表

| | I | II | III | IV | V | Mean | SD |
|-------------------------------------------------|------|------|------|------|------|------|------|
| I：恐怖と苦痛 | | | | | | | |
| 21 私の死は、私にとって最大の恐怖である | .85 | .01 | .01 | .00 | .03 | 4.14 | 1.53 |
| 25 私の死について考えると無性に恐ろしくなる | .83 | -.05 | -.08 | .11 | -.04 | 3.80 | 1.49 |
| 7 死は、私にとって最後の苦しい瞬間である | .80 | -.04 | .07 | .02 | .05 | 3.85 | 1.50 |
| 5 私の死の瞬間を考えると息がつまる | .79 | -.03 | -.12 | .08 | .04 | 4.03 | 1.55 |
| 18 死は、私にとって苦しみの究極の姿である | .71 | .04 | .16 | .07 | -.02 | 3.40 | 1.45 |
| 3 私にとって、自分自身の死とは最後の不幸なできごとである | .66 | .07 | -.03 | -.01 | .01 | 3.88 | 1.51 |
| II：逃避と未知 | | | | | | | |
| 16 私の死について考えるのは難しい | .10 | .77 | -.09 | -.06 | .10 | 4.27 | 1.26 |
| 15 私の死について真剣に考えることはあまりない | -.10 | .75 | -.03 | .03 | -.07 | 3.91 | 1.40 |
| 17 私の死についてはよく分らない | .06 | .74 | .03 | -.06 | .10 | 4.36 | 1.22 |
| 22 私の死について考えてもしかたがない | -.03 | .69 | .12 | .04 | -.08 | 4.16 | 1.34 |
| 23 死がやってくるまで、私の死について考えなくてもかまわない | -.05 | .65 | .09 | .19 | -.13 | 3.87 | 1.39 |
| 6 私の死は未知のことがらである | .14 | .32 | .08 | -.08 | .17 | 4.47 | 1.32 |
| III：消滅と虚無 | | | | | | | |
| 11 死後、時間とともに私の存在は帳消しになっていく | -.02 | -.03 | .72 | -.04 | .02 | 3.56 | 1.49 |
| 27 死とは私が永久になくなってしまふことである | .21 | .03 | .66 | -.10 | -.08 | 3.99 | 1.57 |
| 14 死は私自身のすべての終わりである | .26 | .02 | .64 | -.13 | -.01 | 3.97 | 1.52 |
| 12 私は死ぬことによって全てを失う | .31 | -.01 | .61 | -.05 | -.05 | 3.59 | 1.50 |
| 26 私が死んでもまわりの状況は何ひとつ変わらない | -.21 | .07 | .58 | .12 | .02 | 3.40 | 1.47 |
| 1 私が死んだからといって、世界が変わるわけではない | -.21 | .06 | .47 | -.03 | .16 | 4.46 | 1.50 |
| IV：浄福な来世 | | | | | | | |
| 9 死ぬと、私は清められて生まれ変わることができる | .14 | -.02 | -.08 | .79 | .03 | 3.06 | 1.45 |
| 4 死ぬと私はまた別の世に生まれ変わって、良い人生を送ることができる | .10 | .02 | -.09 | .75 | .02 | 3.21 | 1.49 |
| 24 死ねば私はもっと良い世界へ行ける | .04 | .09 | -.02 | .71 | -.01 | 3.07 | 1.38 |
| V：生の証と人生の集大成 | | | | | | | |
| 20 死ぬまでに私は何か生きた証を残したい | .15 | .03 | -.14 | -.10 | .71 | 4.44 | 1.18 |
| 10 死ぬ時に、何かこの世に自分で納得のゆく大きな意味を残せるように 私は精一杯生きたい | .08 | .07 | -.14 | -.11 | .70 | 4.81 | 1.13 |
| 19 死は私がどう生きたのかの集大成である | -.02 | -.01 | .14 | .15 | .61 | 4.06 | 1.29 |
| 8 死は、私が立派にやりとげなければならない重要な出来事である | -.02 | -.11 | .20 | .19 | .52 | 3.80 | 1.42 |
| 13 私の死は、私が人生の素晴らしさを実感できるひとつの機会である | -.27 | -.05 | .20 | .33 | .42 | 3.40 | 1.40 |
| 寄与率 | 4.08 | 2.73 | 2.55 | 2.02 | 1.93 | | |
| 因子間相関係数 | II | .20 | | | | | |
| | III | .25 | .32 | | | | |
| | IV | -.04 | -.04 | -.24 | | | |
| | V | .17 | .07 | -.01 | .29 | | |
| 削除項目 | | | | | | | |
| 2 今死ねば、私はあらゆる可能性を試さないままに終わってしまう | | | | | | | |

金児・渡部（2003）による先行研究では8つの因子が抽出されているが、本研究では5つの因子が抽出された。これは、先行研究で相互に高い相関のあった因子が1つにまとまった結果であり、以下に述べるとおり死観の構造がまったく異なっていることを意味するものではない。まず、第1因子は先行研究における自己の死観の因子と同じ項目から構成されており、死を恐ろしいもの、苦しいものだととらえる態度を表わしているため、「恐怖と苦痛」と命名した。第2因子の「逃避と未知」も、先行研究では「逃避」と「未知」のそれぞれ別個の因子であったものが1つの因子となっていた。同じく第3因子を構成する項目は、従来は「消滅」と「虚無」という2つの因子に負荷していたが、ここでは1つにまとまり、「わたしが死ねば消え去るだけで、世界は変わるわけではない」という態度、すなわち「消滅と虚無」だと解釈できる。第4因子の「浄福な来世」は来世や輪廻転生に関する因子であり、これは先行研究とまったく同じ結果であった。第5因子は、死に対して積極的にその意味をみいだそうとする態度を表わす項目からなっている。よって「生の証と人生の集大成」と命名した。

それぞれの因子に高く負荷した項目の評定値を加算して尺度得点とした。表2より、5つの下位尺度のうち、住居の都鄙で差がみられたのは「逃避と未知」のみであり、村落に住んでいる人のほうが自身の死の問題から逃避し、それを未知なるものだと捉えている。このように、都市住民と村落住民の間で死に対する態度にほとんど差がないという事実は、都市化それ自体が直接的に死生観を変容させるものではないことを示している。

図4は5つの死観を世代別に示したものである。都市住民と村落住民とで目立った差が認められなかったため、この図では都鄙を区別して描いていない。概して、「消滅と虚無」、「逃避と未知」、「生の証と人生の集大成」といった死観が強く、「浄福な来世」観は非常に弱い。そして、「恐怖と苦痛」がその中間にある。図より指摘される興味深いことは、20歳代から40歳代にかけてはほとんど変化がないが、50歳を越すとすべての死観が急激に強くなることである。宗教

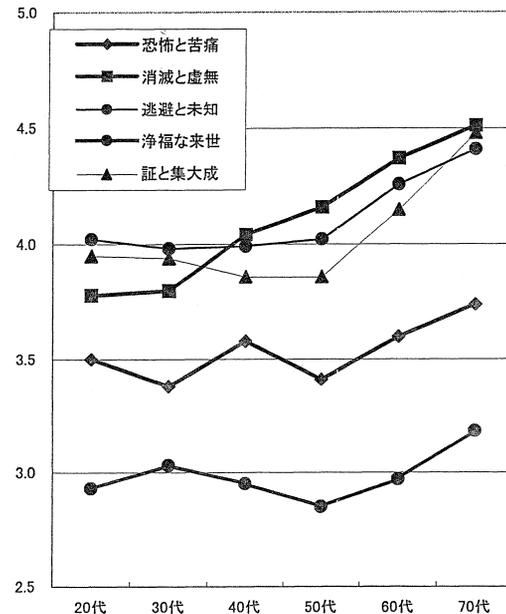


図4 世代別の死観尺度得点

的態度においてもそうである。50歳を過ぎると人は宗教的関心が強くなり、信仰に近づいてゆく(金児, 1997)。この「50歳分岐説」は死に対する態度についても該当する。

(8) 正負の感情

感情状態については、正負いずれも都鄙間で差がみられなかった。また、都市部・村落部ともに正感情が負感情をうまわっており、いずれの住民も情緒面で適応した生活をおくっていることがわかる。この結果は、都市的環境そのものが心理的にマイナスの効果をもたらすとはいえないことを示唆している。なお、正感情と負感情との間の相関係数は $r=.05(n.s.)$ で、この2つの感情が同次元上の両極にあるものではないことが示された。

(9) 自尊心

自尊心は精神的健康や適応の基盤をなすとされている。都市が人びとの精神的健康を阻害するならば、都市民の自尊心は村落民よりも低いはずである。しかし、表2に示したように、自尊心得点は村落住民よりも都市住民のほうが高く、アーバニズム理論や通俗的見解による予測とはまったく逆の結果が得られた。

(10) 生活満足度

今の生活に対する満足度については、居住地域による差がみられなかった。アーバニズム理

論によれば、都市化が進むにつれて生活への満足度は低下していくことが予想されるが、そのような傾向はまったくみられなかった。

(11) 都市化が生活様式や価値観に及ぼす影響

都市化・近代化が進むなかで、人びとが精神的安寧を得るためにはいかなる要因が影響を及ぼしているのだろうか。このことを明らかにするために、次のモデルを考えた。まず、個人内変数と環境変数が習俗や宗教行動に影響を及ぼし、それらが親族・近隣関係、コミュニティへの協同意識、あるいは異文化の受容態度や愛国心を規定し、さらに、そうした諸行動や諸態度が宗教観の形成に与り、宗教観は死観を規定し、最終的に正負の感情状態や自尊心、生活満足感を決定する。このモデルにもとづき、重回帰分析を施した結果が表5である。なお、宗教観は下位尺度得点間の相関が高く多重共線性があるため、因子得点を使用した。また、5つの死観についても同様の問題から高次因子分析を施し、肯定的死観（浄福な来世、生の証と人生の集大成）と否定的死観（恐怖と苦痛、消滅と虚無、逃避と未知）の2つに分類したうえで、それぞれの因子得点を用いた。以下に、有意な標準偏回帰係数を得られたものについて述べることにする。

① 行動変数 個人内変数と環境変数はいずれも行動変数に影響しており、とりわけ年齢はすべての行動変数に高い標準偏回帰係数を示した。すなわち、修養行動、慰霊行動、年中行事・習俗行動は年齢が高いほど多く見られ、逆に、現世利益行動は年齢が低いほど多く見られる。健康状態がよいことも、修養行動、慰霊行動、習俗へのかかわりを高めていた。環境変数については、都市的環境が修養行動を弱め、現世利益行動を強めていた。さらに、家庭に仏壇や神棚があることも大きな影響力を有していたが、非常に興味深いことに、仏壇と神棚では影響の方向が異なっていた。すなわち、仏壇は修養行動と慰霊行動を強め、現世利益行動を弱める働きをするのに対して、神棚は修養行動を低め、慰霊・現世利益行動と年中行事・習俗への参加を促進していた。

② 近所・親戚づきあいと協同意識 近所・親戚とのつきあいや協同意識をもっとも規定してい

るのは年齢と住居の都鄙であり、年齢が正の影響を、都鄙性が負の影響を与えていた。すなわち、年齢が高くなるにつれて近所づきあいや親戚づきあいが盛んになり、地域への協同意識が高まる。しかし、都市住民は村落住民に比し、こうした親族や近隣との関係が稀薄である。また、総じて、宗教行動や年中行事とのかかわりはこうした人間関係や態度を促進させていた。このほかに、男性であることが協同意識を高め、健康状態が良好であることは親戚づきあいを盛んにし、協同意識を高めていた。また、経済状態が良好であれば、近所づきあいが稀薄になることが認められた。

③ 日本と外国への態度 年齢が加わるにつれて、愛国心は顕著に強まっていた。愛国心の高まりには、慰霊行動への参加や年中行事・習俗への関与も寄与していた。また、学歴が高いほど異文化を受容する反面、愛国心は稀薄化していた。このほかに、異文化受容には、健康状態、修養行動、住居の都鄙が貢献していた。村落住民よりも都市住民のほうが、外国人や外国の文化を知ることに関心が高かった。

④ 宗教観 宗教観をもっとも強く規定する個人内変数は年齢であり、年齢は宗教への態度のすべての側面にかかわっていた。年をとるにつれて、向宗教性と加護観念は強まっていくが、霊魂観念は顕著な低下をたどる。とくに霊魂観念における年齢の標準偏回帰係数はきわめて大きな値を示した($\beta = -.42$)。また、女性であることは霊魂観念を強める方向に働き、高学歴はそれを弱める方向に作用していた。環境変数についていえば、仏壇を有することは霊魂観念を稀薄化し、加護観念は神棚を有することによって強まり、家族数が多いことによって弱められていた。

宗教行動と宗教的態度との強い関連性と、両者の因果関係については、すでに他所で詳述し、モデルを提示した(金児, 1997)。本調査において、修養行動が向宗教性を($\beta = .49$)、慰霊行動が加護観念をそれぞれ強く規定していることは、そのモデルに合致した結果である。しかし、現世利益行動は向宗教性を規定せず、加護観念と霊魂観念という固有信仰の形成に与っていることはあらたな発見である。この両研究の結

表5 モデルにもとづく重回帰分析結果

| | 宗教行動 | | | 行事・ 習俗 | 近所 づきあい | 親戚 づきあい | 協同意識 | 日本と外国への 態度 | | 宗教観 | | | 肯定的 自己死観 | 否定的 自己死観 | 感情状態 | | 自尊心 | 生活 満足度 |
|--------------------|---------|---------|----------|-----------|------------|------------|----------|---------------|----------|---------|---------|----------|-------------|-------------|----------|----------|----------|-----------|
| | 修養 | 慰霊 | 現世 利益 | | | | | 異文化 受容 | 愛国心 | 向宗教性 | 加護観念 | 靈魂観念 | | | 正感情 | 負感情 | | |
| 個人内変数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 性別 | .04 | .01 | .08 ** | .13 *** | -.05 | .00 | -.13 *** | -.05 | -.01 | .02 | -.02 | .14 *** | .06 * | -.02 | .05 | -.06 | -.11 *** | .08 * |
| 年齢 | .27 *** | .25 *** | -.13 *** | .16 *** | .18 *** | .12 ** | .28 *** | -.04 | .32 *** | .12 ** | .13 *** | -.42 *** | .02 | .18 *** | -.17 *** | -.30 *** | .07 | .09 * |
| 健康状態 | .08 ** | .07 ** | .04 | .09 ** | .00 | .08 ** | .09 ** | .08 * | .03 | -.04 | .04 | -.03 | -.03 | .01 | .18 *** | -.18 *** | .17 *** | .15 *** |
| 経済状態 | .02 | .04 | .04 | .02 | -.08 ** | .04 | -.03 | .03 | .05 | .01 | .00 | -.06 * | -.02 | -.03 | .06 | -.09 ** | .16 *** | .33 *** |
| 学歴 | -.04 | .02 | .06 | .03 | .00 | -.04 | -.01 | .15 *** | -.11 *** | .02 | -.04 | -.16 *** | -.02 | -.06 | .08 * | .03 | .11 ** | -.01 |
| 環境変数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 住居の都鄙 | -.07 * | -.06 | .12 *** | -.04 | -.19 *** | -.16 *** | -.13 *** | .08 * | .06 | -.02 | .01 | .03 | .09 * | .00 | .02 | -.03 | .04 | -.05 |
| 仏壇の有無 | .22 *** | .22 *** | -.07 * | .00 | .07 * | -.07 | .06 * | .01 | .01 | .01 | -.06 | -.08 * | .04 | .05 | -.05 | .03 | -.02 | -.01 |
| 神棚の有無 | -.07 * | .20 *** | .24 *** | .19 *** | -.02 | .08 * | -.02 | -.07 | .05 | .00 | .09 ** | .06 | .00 | -.01 | -.06 | .03 | -.08 * | .01 |
| 家族数 | -.02 | .02 | .09 ** | .30 *** | .10 ** | .01 | .06 * | .01 | -.03 | .05 | -.07 * | .01 | .01 | .02 | -.04 | -.03 | -.01 | -.05 |
| 行動 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 修養行動 | | | | .04 | .04 | .13 *** | .11 ** | .02 | .49 *** | .01 | .10 ** | -.02 | -.11 ** | .07 | .01 | -.05 | -.02 | |
| 慰霊行動 | | | | .09 ** | .12 *** | .03 | -.06 | .09 ** | -.02 | .17 *** | .07 * | .00 | -.01 | .04 | .00 | -.01 | -.07 | |
| 現世利益行動 | | | | .01 | .04 | .08 ** | .01 | .02 | .02 | .18 *** | .15 *** | .01 | .03 | .08 * | .04 | .12 *** | .04 | |
| 行事・習俗 | | | | .11 ** | .09 ** | .13 *** | .03 | .07 * | -.13 *** | .05 | .02 | .03 | -.03 | .04 | -.02 | .00 | .13 *** | |
| 近所づきあい | | | | | | | | | | -.02 | -.02 | .01 | .01 | .04 | .10 ** | -.02 | .11 ** | -.03 |
| 親戚づきあい | | | | | | | | | | .00 | -.02 | -.04 | -.02 | -.01 | .04 | -.04 | .04 | .07 * |
| 共同意識 | | | | | | | | | | .11 ** | .17 *** | .07 | .07 * | -.05 | .10 * | -.04 | .02 | .04 |
| 日本と外国への態度 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 異文化受容 | | | | | | | | | | .08 * | .07 * | -.02 | .09 ** | -.06 | .07 * | .12 *** | .09 ** | .02 |
| 愛国心 | | | | | | | | | | .01 | .24 *** | .09 ** | .12 *** | .08 * | .09 * | .03 | .09 * | .10 ** |
| 宗教観 ^(注) | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 向宗教性 | | | | | | | | | | | | | .26 *** | -.17 *** | -.04 | -.03 | -.02 | -.04 |
| 加護観念 | | | | | | | | | | | | | .07 | .14 *** | .03 | .04 | .05 | -.06 |
| 靈魂観念 | | | | | | | | | | | | | .40 *** | -.12 *** | -.10 ** | .00 | -.07 | -.04 |
| 肯定的自己死観 | | | | | | | | | | | | | | | .13 *** | -.02 | .16 *** | .12 ** |
| 否定的自己死観 | | | | | | | | | | | | | | | -.08 * | .06 | -.14 *** | -.07 * |
| 調整済みR ² | .15 *** | .24 *** | .09 *** | .19 *** | .18 *** | .14 *** | .24 *** | .06 *** | .22 *** | .31 *** | .34 *** | .18 *** | .32 *** | .14 *** | .18 *** | .13 *** | .20 *** | .23 *** |

(注) 宗教観は因子得点を使用した * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

果の違いは、金児(1997)では大学生が調査対象とされていたのに対して、本研究では広範な年齢層が対象とされたということにあらう。また、年中行事・習俗は向宗教性を低める方向に影響を及ぼしており、伝統的な年中行事へのかかわりが宗教的関心を低めるという結果となった。

近所や親戚とのつきあいは宗教観をなんら規定してはいなかったけれども、コミュニティにおける協同意識は向宗教性と加護観念を強める方向に働いていた。また、愛国心は加護観念を強く規定し、靈魂観念の形成にも寄与していた。そして、異文化を受容する態度は向宗教性と加護観念を高める方向に作用していた。

⑤ 自己の死観 個人内変数で死観を規定していたのは性別と年齢であり、女性であることが肯定的な死観を、年齢を重ねることが否定的な死観を強める働きをしていた。環境変数については、都市に住むことが肯定的な死観を強めていた。行動変数では、修養行動に従事することが否定的な死観を稀薄化していた。対人関係にかかわる領域では、協同意識、異文化受容的態度、そして愛国心が肯定的死観の形成に寄与していた。愛国心は否定的な死観を強める方向をも有していた。

以上の個人内変数、環境変数、行動変数、対人的態度のいずれもが、死観をそれほど強く規定するものではなかったが、宗教観の規定力はすこぶる大きいものがある。向宗教性と靈魂観念はいずれも、肯定的死観を強め、否定的死観を弱める働きをなしていた。それに対して、加護観念は否定的死観を強める方向に働いていた。

⑥ 感情状態 日頃の感情には、個人内変数である年齢と健康状態がもっとも大きく影響をしていた。年齢については、加齢が進むほど正感情も負感情も表出の程度が弱くなる、という興味深い結果を得た。要するに、年を重ねるにしたがい喜怒哀楽を感じる事が少なくなるということである。とりわけ、負感情に対する年齢の規定力は大きく($\beta = -.30$)、高齢者は怒ったり悲しんだりすることが少なくなる。健康状態についてみると、健康であるほど正感情が多く、逆に負の感情は少ない。また、経済状態が良好であれば負感情が弱くなり、学歴が高いほど正

感情が強くなる。

環境変数はまったく感情状態に関係がなく、行動変数では現世利益行動が正感情を強めていた。ここでは、都市に住もうと村落に住もうと、日頃抱く感情状態に違いがないことに留意しておきたい。

環境変数と行動変数はほとんど感情状態を規定しないのに対して、対人的変数は幾分か影響力を有していた。親戚づきあいを除いて、近所づきあひ、協同意識、異文化受容、愛国心のいずれもが、正感情を強める方向に働いていた。しかし、異文化を受容する態度は負感情を強める方向にも作用していた。このことは、異文化を理解したり受容したりしようとする人の心には、かならずしも喜びや楽しみだけではなく、怒りや哀しみも伴っていることを示している。宗教観のうち、感情状態を規定していたのは靈魂観念のみであり、それは正感情を弱める方向に働いていた。

死観については、肯定的死観は正感情を強め、否定的死観はそれを弱める方向に作用していた。

⑦ 自尊心 表5をみると、自尊心に及ぼす各変数の寄与のパターンは、正感情のそれときわめて類似していることに気づかれる。個人内変数では、男性であること、健康状態と経済状態が良好であること、学歴が高いこと、そうした諸変数が自尊心を高めることに貢献していた。先の表2において、自尊心における都鄙差が見られたのは、健康状態はさておき、これらの変数が都市の住民の特徴を表わしていることによるのであらう。

しかしながら、そうした都市民に付随する諸特徴だけが自尊心を高めているのだろうか。あるいは先に述べたように、そうした諸特徴だけが都市住民に異文化を受容させ、死の問題から逃避させず、死を未知なるものとみなさせない方向に働いているのだろうか。はたして、都市に住むこと自体は何の貢献もなしていないのだろうか。このことを確かめるために、性別・年齢・学歴・住居の都鄙を独立変数とし、自尊心・逃避と未知・異文化受容をそれぞれ従属変数とした重回帰分析を施した。この結果を表6に示した。

これによれば、自尊心は男性であること、年齢が高いこと、学歴が高いことによって促進されるが、それだけではなく、都市に居住すること自体が単独で自尊心を高める働きを有している。また、異文化受容についても、学歴の効果は大きいものの、都市に住むことそれ自体が異文化を受容させている。逃避と未知なる死観については、年齢が若いことや高学歴であるという都市に付随する特徴だけが効果を有していた。

表6 重回帰分析結果

| | 自尊心 | 逃避と未知 | 異文化受容 |
|---------------------|---------|---------|---------|
| 個人内変数 | | | |
| 性別 | -.08 * | -.02 | -.02 |
| 年齢 | .13 *** | .11 ** | -.02 |
| 学歴 | .19 *** | -.08 * | .17 *** |
| 環境変数 | | | |
| 住居の都鄙 | .07 * | -.05 | .09 ** |
| 調整済み R ² | .04 *** | .03 *** | .04 *** |

(注) * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

環境変数では、神棚の所有が自尊心を低める方向に作用していた。行動変数では、現世利益行動が自尊心を高める方向に作用していた。対人的変数では、近所づきあい、異文化受容、愛国心のいずれもが自尊心を高めていた。宗教観は自尊心をまったく規定していないが、死観では肯定的死観が自尊心を強める方向に、否定的死観が自尊心を弱める方向に働いていた。

⑧ 生活満足度 生活満足度も、正感情と自尊心のパターンに類似している。個人内変数のうち、女性であること、高齢であること、健康状態と経済状態が良好であること、これらはすべて生活満足度を高める働きをしていた。とくに、経済状態は大きく寄与していた($\beta = .33$)。環境変数はまったく影響を及ぼしておらず、居住環境の都鄙性は生活満足度に関係がなかった。年中行事・習俗への関与は生活満足度を高める方向に作用していた。対人的変数では、親戚づきあいがうまくいっている場合に満足度が高く、愛国心が満足度を促進していた。

宗教行動が生活満足度を規定しないのと同様、宗教観も生活満足度に貢献していなかった。ところが、どのような死への態度をもっているかは生活満足感に影響を及ぼしていた。肯定的な死観は満足度を高め、否定的な死観はそれを低める方向に働いていた。

考 察

以上の分析をとおして、われわれはアーバニズム理論に対して一定の見解を述べるができる。都市住民と村落住民との間で、行動様式や価値観においていくつかの側面に違いが見られた。表2の結果をまとめると、村落部では家族数が多く、また、村落住民は都市住民よりも仏壇や神棚を所有している割合が高く、年中行事や習俗など伝統を遵守し、修養行動や慰霊行動に熱心で、宗教的態度も強く、近所づきあいや親戚づきあいを大切にし、コミュニティにおける協同意識が強い。宗教行動のパターン(図2)から、都市部では現世利益的な行動が顕著であるのに対して、村落部では慰霊的な行動が目立っていた。なかでも西吉野村では「心の宗教-彼岸」志向的な行動が際立っていた。吉野には修験道金峯山寺の本山があり、その他にも史跡や古社寺が集中する聖地として知られている。このような宗教的伝統が他の地域との差異をもたらしているのであろう。

これらの結果から、村落においては伝統的な習俗や信仰が保たれ、近隣関係も密で、コミュニティの紐帯も堅固であることが明らかである。この限りにおいては、アーバニズム理論に軍配があがるだろう。序論にも述べたように、田舎には親密で温かい支援的な社会的関係が残っており、都会では社会的関係に束縛されたくないという個人主義が強いといえる。田舎への郷愁は、都会人にとってけっして神話や夢物語ではない。

しかしながら、他方において、都市住民は村落住民よりも学歴が高く、異文化を受容しようとする姿勢が強く、死の問題から逃避する傾向が少なく、高い自尊心が維持されていた。これらの結果は、都市化によって失われた伝統と共

同体の紐帯、そしてその喪失がもたらす精神的苦痛があらたなネットワークの構築によって補完され、都市市民の精神的安寧を支えている可能性を示唆している。異文化を受容する姿勢が都市住民に強いこと、そして、都市に居住すること自体がその姿勢をもたらしている（表6）ことが、これを端的に示している。

そもそも、村落では道で出会う人はたいてい知り合いであるが、都市では多様で知らない人びととの出会いのほうが頻繁である。しかし、都会の喧騒性と多様性が都市市民の好奇心を掻き立てることも事実である。都市生活をおくるとをとおして、人びとは友人以外の人びととのつきあいの仕方も学習する。都市における異文化理解の機会の多さが、こうした状況から生じるのであろう。

たとえば数年前、大阪府下のI市の新興住宅地に大学が誘致されたが、当初は環境が悪化するなどの理由で住民の反対もあった。しかし、ミッション・スクール特有の垢抜けした学舎と開放的なキャンパス、そして若者文化の流入とあいまって、たちまち市民と融合し、市民による諸活動に学生の参画を求めるといった関係にまで発展した。こうした経験が都市市民の自尊心の高揚をもたらしていることは想像に難くない。

死観に関しては、都市に住むこと自体が肯定的な死観を促進していた。この理由は何だろうか。都市は高度医療へのアクセス可能性が高いうえに、在宅医療、介護支援システム、介護ボランティア、あるいは自宅で死を迎えるためのシステムなど、死にまつわるそうした制度構築への関心と運動も顕著である。都市における核家族化と高齢化は、死への不安を強めるように思われようが、事実は逆で、都市がもつ死への対処システムが、村落よりも都市部において死を肯定的に受け止めさせていると考えられよう。

ところで、死に対して肯定的な見方をもつことの意義は、死の不安に関する諸研究に見いだすことができる(Neimeyer, 1994)。たとえば、死に対する不安の少ないことが、末期患者の精神的ケア、遺された家族のケア、悲嘆のプロセスに積極的意義を有している(Lonetto &

Templer, 1986)。したがって、死を肯定的に受け止める死観は、いたずらな死の不安を軽減し、家族や自身が死に直面したとき死を受容し、家族の死に対しては新しい希望をもって再出発することができる(柏木, 1995)。本研究では、都市がそうした機能を有することを明らかにすることができた。

本研究では、宗教が肯定的な死観を促進し、否定的な死観を抑制する機能を果たしていることを示したが、そうした宗教観が都市化に付随する諸要因によって稀薄化している現状も認められた。だとすれば都市は宗教に回帰するか、あるいは宗教に取って代わるものをみつけなければならないであろう。徹底した合理主義はそのひとつであろう。たとえば、医師は宗教的信仰がきわめて稀薄であるけれども、死を徹底的に見つめるがゆえに、かえって死を肯定的に受け止めている(金児, 1993)。今後ますます進む社会の高度情報化と成熟化は、都市と村落の境界をボーダレス化し、村落も都市化していくことだろう。そのことによって村落も伝統の喪失と向き合わなければならない。

注

1. 本研究は「都市文化創造のための人文科学的研究」(21世紀COEプログラム)における研究の一環として行われたものであり、都市文化研究センターの助成を受けた。なお、本研究の一部は、2003年度日本社会心理学会第44回大会にて発表された。
2. ここでは人口密度の分母を居住可能面積ではなく総面積としたが、居住可能面積を使用しても、本研究で対象とされた村落地域はきわめて人口密度が低い。
3. 各年代から均等に抽出したことについては、標本が母集団を反映していないとの批判もあろう。しかし、本研究では、とくに村落地域において統計分析に耐えうる数の若年層の資料を収集することを重視した。
4. 日本人の宗教的態度については、金児による因子分析を中心とした一連の計量的研究によって、向宗教性、加護(報恩)観念、靈魂(応報)観念の3つが析出されている(金児, 1997)。向

宗教性とは、一般的な意味で宗教に対して好意的態度（接近）を示すのか、否定的態度（回避）をとるのかという次元に関するものである。加護観念は、風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつきに親しみを感じ、自然にも敬虔な気持ちをもった宗教性である。これが強く働くと仏神への報恩感謝の念となり、オカゲさまという恩情感がこの宗教性の中核を成す。靈魂観念とは、靈的存在への信仰、死者への畏怖の感情、あるいは願いごとをかなえてくれたり、祟りや罰を与えたりするような人知を超えた存在に対する畏怖の念、あるいは輪廻転生を信じること、そうした観念の複合したものである。いわゆるタタリ意識という情念の観念に相当するといえる。したがって、向宗教性とは常識的な意味での宗教、つまり教団・教義・戒律といった目に見える要素から成る宗教に対する態度であるのに対して、加護観念と靈魂観念は、日本人の心の深層に隠れている原始的な心性—民俗宗教性あるいは固有信仰—であり、当人もそれを宗教であるとは通常意識しない宗教性であるといえる。オカゲとタタリという二つの観念は、平生はオカゲさま、変事があればタタリというように、日本人の宗教性の複合体を構成している。加護観念と靈魂観念は、仏教や神道に限らず、広く日本人の宗教心の根底をなすものである。

5. 「おみくじ・易・占い」については、村落部では27.4%であるのに対して、都市部では37.5%であった。このように、現世利益的な行動のなかには、都市部のほうが盛んになされているものがある。
6. 本論文では扱わなかったけれども、「異文化拒絶」尺度も構成されており、この尺度得点と「愛国心」得点との間には、強い正の相関が得られている($r=0.33$, $p<0.001$)。この結果は、異文化の受容と拒絶には異なるメカニズムが作用していることを暗示している。
7. 金児(1997)では、現世利益行動は3種の宗教観すべてをプラス方向に規定していた。

文 献

- Amato, P. R. 1983 Helping behavior in urban and rural environments: Field studies based on a taxonomic organization of helping episodes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 571-586.
- Bradburn, N. 1969 *The structure of psychological well-being*. Chicago: Aldine.
- Campbell, A. 1981 *The sense of well-being in America*. New York: McGraw-Hill.
- Commission on Population Growth and the American Future 1972 *Population and the American future*. New York: New American Library.
- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Crocker, J., & Wolfe, C. 1999 *Rescuing self-esteem: A contingencies of worth perspective*. Unpublished manuscript, University of Michigan.
- Dollard, J., Doob, L., Miller, N., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. 1939 *Frustration and aggression*. New Haven, Conn.: Yale University Press.
- Factor, R. M., & Waldron, I. 1973 Contemporary population densities and human health. *Nature*, 243, 381-384.
- Fischer, C. S. 1976 *The urban experience*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- 〔フィッシャー（松本康・前田尚子訳） 1996 『都市的体験—都市生活の社会心理学』未来社〕
- Fischer, C. S. 1982 *To dwell among friends: Personal networks in town and city*. Chicago: University of Chicago Press.
- 〔フィッシャー（松本康・前田尚子訳） 2002 『友人のあいだで暮らす—北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社〕
- Ford, A. B. 1976 *Urban health in America*. New York: Oxford University Press.
- 堀江尚子・金児曉嗣・河野由美・渡部美穂子・向井有理子・岸川真理子・宮崎弦太 2003 都市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴(6)—ソーシャル・サポートの受容とネットワークの多層性—日本社会心理学会第44回大会論文集, 732-733.
- 石井研二 1994 『銀座の神々』新曜社

- 金児曉嗣 1993 宗教性と死の怖れ 石黒卓夫
（編）『宗教学と医療』 175-208頁, 弘文堂
- 金児曉嗣 1998 宗教と心理的充足感 濱口恵
俊（編著）『世界のなかの日本型システム』
301-329頁, 新曜社
- 金児曉嗣 1997 『日本人の宗教性 —オカゲとタ
タリの社会心理学』 新曜社
- 金児曉嗣・河野由美・渡部美穂子・向井有理子・
岸川真理子・堀江尚子・宮崎弦太 2003 都
市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴
（1）—都市と村落の宗教行動—, 日本社会心
理学会第44回大会発表論文集, 722-723.
- 金児曉嗣・渡部美穂子 2003 宗教観と死への態
度 大阪府防犯協会連合会ホームページ「人文
研究」, 54, 85-109.
- 柏木哲夫 1995 『死を学ぶ』 有斐閣
- 河野由美・金児曉嗣・渡部美穂子・向井有理子・
岸川真理子・堀江尚子・宮崎弦太 2003 都市
住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴（2）
—コミュニティ意識と宗教性—, 日本社会心理
学会第44回大会発表論文集, 724-725.
- Krupat, E. 1986 *Peoples in cities: The urban
environment and its effects*. Cambridge
Series in Environment and Behavior, Boston:
Cambridge University Press.
[クルパット（藤原武弘監訳）1994 『都市生
活の心理学 —都会の環境とその影響』西村書
店]
- Leary, M. R. 1999 The social and psychological
importance of self-esteem. In R. M. Kowalski
& M. R. Leary(Eds.), *The social psychology of
emotional and behavioral problems*.
Washington, D.C.: APA Books.
- Lonetto, R., & Templer, D. I. 1986 *Death
anxiety*. Washington, DC: Hemisphere.
- Louis Harris Assoc. 1979 *A survey of citizen
views and concerns about urban life*.
Washington, D.C.: U.S. Department of
Housing and Urban Development, Office of
Policy Development and Research.
- Mann, P. H. 1964 *An approach to urban
sociology*. London: Routledge and Kegan
Paul.
- McCarthy, J. D., Gale, O. R., & Zimmern, W.
1975 Population density, social structure,
and interpersonal violence: An
intermetropolitan test of competing models.
American Behavioral Scientist, 18, 771-789.
- 向井有理子・金児曉嗣・河野由美・渡部美穂子・
岸川真理子・堀江尚子・宮崎弦太 2003 都
市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴
（4）—自尊心と異文化への態度—, 日本社会
心理学会第44回大会発表論文集, 728-729.
- Neimeyer, R. A.(Ed.) 1994 *Death anxiety
handbook: Research, instrumentation, and
application*. Washington, D.C.: Taylor &
Francis.
- 大阪府防犯協会連合会ホームページ 2003 大
阪の事件・事故2003
- 大谷信介 2001 都市ほど近隣関係は稀薄なの
か？ —都市別特徴と居住類型別特徴—, 金子
勇・森岡清編『都市化とコミュニティの社会学』
170-191頁, ミネルヴァ書房
- Polls 1967 2(Summer)
- Richardson, B. M. 1973 Urbanization and
political participation: the case of Japan.
American Political Science Review, 67,
433-452.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent
self-image*. Princeton: Princeton University
Press.
- Swedner, H. 1960 *Ecological differentiation
of habits and attitudes*. Lund, Swiden: GWK
Gleerup.
- Tafarodi, R. W., & Vu, C. 1997 Two-
dimensional self-esteem and reactions to
success and failure. *Personality and Social
Psychology Bulletin*, 23, 626-635.
- Tsai, Y-M., & Sigelman, L. 1982 The
community question: a perspective from
national survey data—the case of the USA.
British Journal of Sociology, 33, 579-588.
- 渡部美穂子・金児曉嗣・河野由美・向井有理子・
岸川真理子・堀江尚子・宮崎弦太 2003 都
市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴
（3）—一人称の死と二人称の死—, 日本社会
心理学会第44回大会発表論文集, 726-727.
- Whyte, M. K., & Parish, W. L. 1983 *Urban*

- life in contemporary China*. Chicago: University of Chicago Press.
- Wirth, L. 1938 Urbanism as a way of life. *American Journal of Sociology*, 44, 3-24.
- Zuiches, J. J. 1981 Residential preferences in the United States. In A. Hawley & S. Mazie(eds.), *Understanding Nonmetropolitan America*, 72-115, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- (2003年11月10日論文受理, 2004年1月9日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

The Modern Metropolis: Can It Exhaust Its Citizens' Minds and Even Society Itself ?

Mihoko WATABE & Satoru KANEKO

The purpose of this study is to elucidate how urbanization has brought about changes in people's value systems, behavior and personalities. A questionnaire survey was conducted among 4,000 city and village people in the Kansai area. The questionnaire asked about life-style, religious behavior and attitudes, involvement in manners and customs, attitudes toward community, attitudes toward death, acquaintances within the neighborhood, patriotism, self-esteem etc. The resulting analysis shows that urbanization weakens community consciousness and traditional attitudes, but urbanization strengthens people's self-esteem and lets people accept different cultures. This study shows that urbanization weakens the human relations of citizens, but urbanization in itself never causes mental stress.

Keywords : urbanization, religion, death, attitudes toward community, self-esteem

都市は人の心と社会を疲弊させるか？（渡部・金児）

資料：質問内容

<個人内変数>

- F1 あなたの性別はどちらですか。 1. 男 2. 女
- F2 あなたが生まれたのはいつですか。 明治・大正・昭和（ ）年生まれ
- F3 あなたは小学校から数えて、全部で何年間学校に通いましたか。 （ ）年間
- F4 あなたのお宅の毎月の経済状態はいかがですか。あてはまる番号に○をつけてください
1. 非常に苦勞している 2. やや苦勞している 3. どちらともいえない
4. あまり苦勞していない 5. まったく苦勞していない
- F5 一般的に言って、あなたの現在の健康状態はいかがですか。あてはまるものを選んで○をつけてください。
1. まったく健康 2. かなり健康 3. 普通 4. あまり健康でない 5. まったく健康でない

<環境変数>

以下の質問について、あてはまる番号に1つずつ○をつけて下さい。

- ① お宅のご家族は、あなたを含めて何人ですか。単身赴任や下宿されている方も含めてお答え下さい。
1. 1人 2. 2人 3. 3人 4. 4人 5. 5人 6. 6人 7. 7人以上
- ② あなたの家には仏壇がありますか。 1. ある 2. ない
- ③ あなたの家には神棚がありますか。 1. ある 2. ない

<宗教行動項目>

社会一般では、宗教とか信仰に関係することがらとして、次のようなことが行われています。あなたがふだんさ
っておいでのことがありましたら、次の中からあてはまるものすべてに○つけてください。

1. 墓参りをしている どの程度なさっていますか → (年 回)
2. この1～2年の間に、おみくじを引いたり、易や占いをしてもらったことがある
3. 祖先や亡くなった肉親の霊をまつる
4. 仏壇にお花やお仏飯をそなえる
5. 神棚にお花や水をそなえる
6. 決まった日に神社やお地蔵さんなどにお参りに行く
7. 折りにふれ、おつとめをしている
8. 聖典や教典など、宗教関係の本を折りにふれ読む
9. 宗教に関する新聞やパンフレットを読む
10. 信仰グループに参加している
11. 奉仕グループに参加している
12. この1～2年の間に身の安全や商売繁盛、安産、入試合格などを祈願しにいったことがある
13. お守りやお札など縁起ものを自分の身のまわりにおいている
14. ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている
15. 初詣に行く
16. 宗教とか信仰とかに関係していると思われることは何も行っていない

<行事・習俗>

次の年中行事のうち、あなたの家でなさっておられるものがあれば、いくつでも番号に○をつけてください。

1. 七五三の宮参り 2. 雛祭り 3. 彼岸 4. 端午の節句 5. 七夕
6. お盆 7. 月見 8. 七草粥 9. 節分(豆まき) 10. 正月のしめ飾り

<近所・親戚づきあい>

人とのつき合いについておうかがいします。

- | | | |
|---------------------------------------|-------|--------|
| 1. お宅では、日ごろつき合っている親せきは多いほうですか | 1. はい | 2. いいえ |
| 2. 親せきには信頼できる人が多いですか | 1. はい | 2. いいえ |
| 3. お宅では、隣近所の人とのつき合いは多いですか | 1. はい | 2. いいえ |
| 4. 隣近所の人には、信頼できる人が多いですか | 1. はい | 2. いいえ |
| 5. この近所の人たちは、生活のうえで張り合っていることが多いと思いますか | 1. はい | 2. いいえ |
| 6. 近所の人たちとのつき合いには、わずらわしいことが多いと思いますか | 1. はい | 2. いいえ |

<協同意識項目>

以下の地域についての意見に対して、あなたの現在のお気持ちに最も近いものを、それぞれについてあてはまる番号に1つずつ○をつけてください。

1. 近所づきあいはできるだけしたい
2. 地域の皆と何かをすることで、自分の生活の豊かさを求めたい
3. 地域活動に参加して、さまざまな世代や職業の人と交流したい
4. 地域をほめられると、自分がほめられた気になる
5. 地域の人とは助け合うのが大切だ
6. 自分達の生活環境をよくするために、地域での活動に参加するのは当然だ
7. 地域活動には、日中に時間のある人だけでなく、勤めている人も参加すべきだ
8. 地元の行事や祭りには積極的に参加したい

<日本と外国への態度>

次の意見についてあなたはどのように思いますか？あなたの意見として適切なものに1つずつ○をつけてください。

異文化受容項目

1. 他の民族の文化をもっとよく知りたい
2. 外国人とは文化が違って初めはわかりあえなくても、あきらめずにわかりあえるまで努力したい
3. 異なる民族の人びとともっと深くつきあいたい
4. 外国の人とつきあうと視野が広がるのでよいと思う
5. 異なる民族の友人がたくさんほしい
6. 日本の文化と外国の文化の両方を同じように尊重していかなければならない
7. 日本は諸外国から学ぶことが多い
8. 外国の文化を積極的に取り入れることは、日本にとってよいことである
9. もっと日本人はいろいろな部分で外国の人をうけいれていかねばならない

愛国心項目

1. 私は日本という国が好きだ
2. 私は日本人であることを誇りに思う
3. 生まれ変わるとしたら、また日本人に生まれたい
4. 物価の安い外国で暮らすより、少々高くても日本に暮らしたい
5. 日本人は優れた民族である
6. 日本は世界で一番よい国である
7. 日本が戦後に驚くほどの経済成長をとげたのは、国民が優秀だからだ

都市は人の心と社会を疲弊させるか？（渡部・金児）

＜正感情・負感情項目＞

この数週間のあいだ、あなたは次のようなことを感じたことがありますか。「はい」か「いいえ」でお答えください。

1. ここ数週間で、とくに何かはわくわくしたり、興味をもったりしたことがありましたか
2. ここ数週間で、じっとしていられなくて、椅子に長く座っていられないほど、
落ち着かない思いをしたことがありましたか
3. ここ数週間で、誰かがあなたのしたことを褒めてくれて、得意に思ったことがありましたか
4. ここ数週間で、たいへん孤独に感じたり、または、他の人から孤立していると思ったことがありましたか
5. ここ数週間で、何事かをやり遂げて、喜びを感じたことがありましたか
6. ここ数週間で、退屈だと感じたことがありましたか
7. ここ数週間で、意気揚々とした気分になったと感じたことがありましたか
8. ここ数週間で、憂鬱だと感じたり、不幸だと感じたりしたことがありましたか
9. ここ数週間で、物事が思い通りになっていると思ったことがありましたか
10. ここ数週間で、誰かに非難されて、当惑したことがありましたか

＜自尊心項目＞

あなた自身のことについてお聞きします。次の文章を読み、その内容があなた自身に当てはまる内容か、当てはまらないものかを判断してください。あてはまる番号に1つずつ○をつけてください。

1. 自分は社会の役に立つ人間である
2. 自分は全くだめな人間だと思うことがある
3. 自分には自慢できるところがあまりない
4. 私はどのような人の前でも堂々としていられる
5. 私は周囲の人に信頼されない
6. 少なくとも人並みには、価値のある人間である
7. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う
8. 周囲の人にとって、私はなくてはならない存在である
9. 色々な良い素質を持っている
10. 周囲の人は私に能力がないと思っている

＜生活満足度＞

あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。

1. 満足していない 2. あまり満足していない 3. まあ満足している 4. 満足している